

[COMMUNION]

WEB:<http://www.nskk.org/tokyo/index.html>
E-mail:comm.tko@nsk.org
PHONE:03-3433-0987
FAX:03-3433-8678
Diocese Office



第45号
(通巻1280号)

2018年7月22日
編集：広報委員会
委員長：渡辺康弘
日本聖公会東京教区
港区芝公園 3-6-18

5月19日 教区合同堅信式（主教座聖堂）



5月20日 下町ペンテコステ（月島聖公会）



東京聖テモテ教会・東京諸聖徒教会
合同ペンテコステ礼拝（聖テモテ）

4月28日 多摩グループインBBQ（聖マルコ）



5月31日 一粒の麦の会 教会巡りバスツアー
（清里聖アンデレ教会）



6月22日～25日
3教会（池袋・マルチン・練馬）韓国社会宣教スタディーツアー



3万人もの人が犠牲になった「済州4・3事件」。70年前のことである。済州島出身の両親を持つ私は1974年高校生の時にこのことを偶然に知った。父に尋ねると温厚な人が烈火の如く「誰に教えてもらった！」と私の頬を強く殴った。その日以来、私の中でこれはタブーになった。

正義と平和協議会 平和メッセージ

済州4・3は私たちの歴史です＝正義・平和を！

聖公会生野センター総主事 呉光現(オ・グワンヒョン)

私は1957年に大阪生野で在日2世として生を受けた。今と言う大阪コリアタウンの一角である。家族親戚はもちろんのこと周囲にいた在日の大人たちはほとんどが済州島出身者。共同体意識の強い済州人は助け合って生きてきた。しかし済州4・3のことは決して聞くことはなかった。当然私たちはそのことを知らない。知らないから関心がない。関心がないから次の世代に継承されていない。まさに記憶の自

殺・他殺の連鎖だったのが済州4・3の数十年であった。

1947年3月1日、済州の中心地の小学校でもたれた南北分断反対の集会は20万人の島人口の内、3万人が集まっ



た。そこで警察官が発砲し6人が犠牲になった。全員背中から打たれた。つまり向かってくる相手ではなく逃げの命を権力が奪ったの

であった。翌年4月3日に「このまま座して死ぬよりは闘って死のう！」と島民が立ち上がった。まさに大韓民国建国(1948年8月15日政府樹立)直前であった。今に続く私のルーツの朝鮮半島の分断に対する最後の闘いであった。

島は差別される。沖縄もそうだ。済州島も「本土」から見ると差別して当たり前のところだった。アメリカ軍政庁は済州島民の70%が「アカ」と規定し、本土から来た軍警は「アカ」は殺してもかわらないとひたすら島民を抑圧し虐殺の限りを尽くした。

「アカ」とレットルを貼られた済州島民はその後長い歲月済州4・3のことを語ることも許されず、「悲しむ自由」すら与えられなかった。

済州4・3にかすかな光を照らしたの

は日本に在日であった。私が生まれた年の1957年から文学作品で表現が始まり韓国の民主化と共にその事実、真実が少しずつ浮上してきたのだ。2000年に済州4・3特別法ができ、70周年の今年はロウソク集会で発足した文在寅大統領が12年ぶりに参席しこう語った。「4・3を直視しなければなりません。正義でなく公正でなければどんな旗であろうと国民のためになりません」。現場で聞いていた私はからだを震えた。隠されたものは必ず明らかにされる。そしてそれは不断の闘いからしか得られない。

今年の済州4・3のスローガンは「済州4・3は大韓民国の歴史です」である。これには複雑な思いを持つが「歴史」にすらできなかったものが歴史として堂々と残されることがいかに大切なことだろうか。数十年間耐えてきた済州島民にとって、済州島にルーツを持つ私たちにとって、もう「知らない、関心がない」とは言ってはならない。だから私は「済州4・3は私たちの歴史」と呼びたい。

1948年…、今一度思い出したい。この年、パレスチナでは5月に「イスラエル」が建国され「ナクバ」(注)という言葉が残った。まさに戦後すぐに暴力が権力を持つて世界を支配しようとした年である。今年、このナクバの日にアメリカはエルサレムに大使館を移転した。この世界は未だに国境を越えて「国家暴

力」が支配しているのだろうか？

皮肉なこと
にそのトランプ大統領が史上初めて北朝鮮の指導者と会談を持ち朝鮮戦争が終わ

ろうとしている。どんな形であれ私は戦争が終わるのは賛成である。平和に勝るものはないのだ。しかし私はルーツのある地だけが平和になったらいいとは思わない。平和はすべての人が享有するものだ。今一度「ナクバ」という言葉を思いだしたい。

これからも平和は守るものではなく創り出していくものであることを祈りの中心にすえて生きて行きたい。

【ナクバ】

アラビア語で「大惨事」を意味する。欧州など各地で迫害されたユダヤ人が旧約聖書に記される「約束の地」とされたパレスチナに渡り、1948年5月14日にイスラエルを建国。もともと住んでいた多数のパレスチナ人が故郷や土地を追われ、近隣国などに逃れて難民となった悲劇を思い起こすため、翌15日がナクバの日となった。離散したパレスチナ人は70万人超に達するといわれる。



平和メッセージ こどもたちへ

「聖地ろうあ子どもの里」の友だちを助けてください

聖オルバン教会 吉松 英美

ヨルダンという国

世界地図を開いて、日本から目を左へすこしずつ動かしてください。すると中国、インド、アフガニスタン、イラン、イラクときて、ひととき大きな国・サウジアラビアにたどりつきます。

そのとなりにある小さな国が、ヨルダンです。広さは日本の4分の1、人口は950万人。首都はアンマンといいますが、今から100年くらい前までは、サルトいうところが中心でした。サルトは人口が20万人ほどで、まわりを山で囲まれています。2000年以上もむかしのイエスさまの時代からある古い町です。町にはローマ時代の遺跡が残っています。

「聖地ろうあ子どもの里」

このサルトに「聖地ろうあ子どもの里」という学校があります。耳の不自由な3歳から18歳までの子どもたちが150人ほど寮生活をして勉強しています。

ヨルダンをはじめ、イラクやシリア、エジプト、パレスチナなどまわりの国々からも来ています。算数（数学）や国語、理科、英語からコンピューターの使い方まで日本の学校と同じことを学んでいます。耳が聞こえないので、ことばは、手や指を動かす「手話」です。この学校では、学年が1年でも上の子は、年下の子たちのめんどうをよくみます。困っている子がいたら、進んで助けるという訓練が行き届いています。

大きくなったら社会へ出て働くことができるように、自動車の修理、刺繍や陶芸などの手芸、料理も教えています。大学へ行って勉強し、卒業後は母校の先生になる人もいます。



図工の授業

中東には耳の不自由な人が100万人

この学校では、内戦のシリアから逃れて難民キャンプにいる人たちの耳の治療をしたり、手話を教えたり、授業をしたりして難民の支援活動もしています。

中東には耳の不自由な人たちが100万人いるといえます。

みなさんのご支援お願いいたします

学校の経営にはたくさんのお金がかかります。しかし、戦争や貧困のため、授業料を払えない人がほとんどです。「聖地ろうあ子どもの里」は、教会が建てた学校ですが、貧しいことには変わりはありません。必要なお金のほとんどを外国の教会や会社などからの献金や寄付金に頼っています。

日本からも教会やグループからの献金や寄付金を集めて送っています。スウェーデン、デンマーク、スイス、ドイツ、イギリス、アメリカなどに比べるとまだまだ金額は少ないのですが、大事なことは金額よりも一人一人の気持ちです。同じ時代に、同じ地球に生まれながら、たまたま耳が不自由なばかりに、みなさんと同じような教育を受けることが出来ない友だちがたくさんいます。みなさんの友情をヨルダンにいるお友だちに与えてください。

パウロという人はこういっています。「うれしい時とともに喜び、悲しい時とともに悲しもう」と。



男子の職業訓練（木工）



女子の職業訓練（裁縫）

なぜ主教が選ばれるのか

司祭 西原 康太

この度、東京教区広報委員会より、「なぜ主教を選ぶのか」というテーマで何か書くようにのご依頼を受けました。主教は、あくまでも聖霊の導きによって、祈りによって召し出されるものですので、あえて題を「なぜ主教が選ばれるのか」とさせていただきます。それにお応えするには、そもそも「主教職」とは何か、について考えなければなりません。詳細には、拙書、『聖公会の職制論―エキュメニカル対話の視点から』をお読みいただければ幸いですが、本稿ではいくつかのポイントのみ記させていただきます。



由来する言葉であり、語源は公教の教理を「教えること」と(ラテン語で catechizo)と共通です。教会史上も、時に主教座を、主教の王位的、政治的権威、権力の象徴として捉える過ちが横行しますが、本来の意味はむしろ大学の講「座」(chair)にニュアンス的には近いものです。さらに、この「教える働き」としての主教職理解には「教導者」あるいは「先導者」という要素が含まれます。古代教会の主教職が困難な時代にあつて、教会の進むべき道筋を指示したように、現代の主教職もまさに先導職として、教会、世界、社会の方向性、ヴィジョンを提示しなければならぬのです。1988年ランベス会議では主教職の働きとして以下の諸点が確認されています。①宣教における教会一致の象徴、②信仰の教師・擁護者・神学者、③信徒及び牧会者に対する牧会者、④御言の説教とサクラメント執行の権限附与者、⑤信仰共同体が置かれる世界に対する宣教のリーダー・先導者、⑥神の民を養育し配慮する牧者、⑦社会の傷を癒す者、⑧地域教会が働く社会における良心の声、⑨愛による贖いの福音に照らして神の正義を宣言する預言者、⑩家族の全体・その痛みと喜びにおける頭・家族の生活と愛の中心。

聖公会、ローマ・カトリック教会、東方正教会などが現在も保持している主教職の原型は、5世紀頃の古代教会において、すでに成立していたと言われています。次第に地方教会に主教座聖堂(大聖堂・cathedral)が据えられ、主教座聖堂は文字通り「主教座」と呼ばれる椅子が置かれます。この主教座が、使徒を通して全普遍教会に伝承された信仰とサクラメントの恵みを象徴し、同時に、過去から現在、現在から未来へと至る途絶えることのない「使徒継承」の「へしるし」となっていくのです。この「主教座」(ラテン語では cathedra)は、文字通り「椅子」に

由來する言葉であり、語源は公教の教理を「教えること」と(ラテン語で catechizo)と共通です。教会史上も、時に主教座を、主教の王位的、政治的権威、権力の象徴として捉える過ちが横行しますが、本来の意味はむしろ大学の講「座」(chair)にニュアンス的には近いものです。さらに、この「教える働き」としての主教職理解には「教導者」あるいは「先導者」という要素が含まれます。古代教会の主教職が困難な時代にあつて、教会の進むべき道筋を指示したように、現代の主教職もまさに先導職として、教会、世界、社会の方向性、ヴィジョンを提示しなければならぬのです。1988年ランベス会議では主教職の働きとして以下の諸点が確認されています。①宣教における教会一致の象徴、②信仰の教師・擁護者・神学者、③信徒及び牧会者に対する牧会者、④御言の説教とサクラメント執行の権限附与者、⑤信仰共同体が置かれる世界に対する宣教のリーダー・先導者、⑥神の民を養育し配慮する牧者、⑦社会の傷を癒す者、⑧地域教会が働く社会における良心の声、⑨愛による贖いの福音に照らして神の正義を宣言する預言者、⑩家族の全体・その痛みと喜びにおける頭・家族の生活と愛の中心。

さて、このように多様な主教の職務を、果たしてお一人の主教がすべて担うことができると思われるでしょうか。ここまでは、「主教」とは書かずに「主教職」と記述しています。この違いは重要で、「主教職」というのは、単に「主教さん」という個人によってのみ担われるのではなく、古代教会以来の神学を継承する聖公会は、主教職は、「人格的」(personal)、「同僚的」(collegial)、「共同体的」(communal)に担われるのだ、と理解してきました。人格としての「主教」はもちろん不可欠です。しかし、教区の中で、主教職は、主教個人だけではなく、司祭や執事による聖職団によって「同僚的」にも担われます。いわゆる教役者会なども、同僚的に主教職を担うものです。管区レヴェルでは主教団、日本聖公会では主教会と言いますが、これも同僚的なものです。また、主教職は、さらに、主教、司祭のみならず、信徒も含めた教会全体で共同体的にも担われます。実は、アングリカニズムの重要な要諦の一つはこの共同体的な主教職理解にあります。これを具体的に表現するものは「教区会」です。管区で言えば「総会」です。これらの主教職に含まれる人格的、同僚的、共同体的職務は、実際には聖公会の「教区」を基本とする共同体の中で担われるのです。ただ単に「主

教」さんが主教職を担っているのではなく、信徒のみなさんも含めた教区共同体全体で主教職を担っているということなのです。最近のアングリカン・コミュニケーションでは、「エписコパル・リーダーシップ」、主教職のリーダーシップをいかにして協働的に教区教会全体で分かち合うかが、どこの管区においても議論されています。多様な主教職としての働きのすべてを、お一人の主教さん個人で担うのは実際には不可能です。人格的・主教を中心にして、聖職団、信徒団を含めた教会全体で、「職」を担い合う道を模索し続けることが求められているのです。主教とは「アンカー・パーソン」であると言われる。主教と共に走り、あるいはバトンを繋いでいくのは、聖職、信徒すべてを含めた一人ひとりに他ならない、という理解です。聖職団、そして信徒のみなさん、お一人おひとりもまた、この主教職を担う責任を持っているのだ、ということ、ぜひとも忘れないでいただきたいのです。「なぜ主教が選ばれるのか」。それは、「同僚的」にも「共同体的」にも担われている「主教職」を、「人格的」に示してくださる方が召し出される出来事に他ならないのです。

礼拝音楽委員会主催

聖歌集を歌う会



をご紹介します！



日々の礼拝を
ともに

この会のスタートは2006年。改訂作業を経て47年振りに現聖歌集が発行される直前の夏です。古今聖歌集に馴染んだ多くの信徒の戸惑いの中、新しい聖歌集（といって

も、半数以上が古今から引き継がれたこと、ご存じですか？）が少しでも早く、礼拝の賛美を支えるものとして受け入れられ、親しまれるように、との願いからでした。々々

北関東教区との共催で、参加者はスタッフ含めてなんと90名！会場となった中軽井沢の立教女学院キャンプ場はギューギュー詰め、半ば酸欠になりつつも、新鮮な聖歌の息吹を感じながら歌い続けた一泊二日の熱いひとときでした。々々

以来、夏の恒例イベントとして、毎年8月の第1金曜日から土曜日に開催、今年で13年目を迎えます。聖歌集と同じ時を歩んできました。第5回目以降は箱根スコレプラ

ザに場所を移し、毎年40名ほどが集っています。

近年は「聖歌の紹介、聖歌集の定着」という当初の目的から、「より深く味わう」「より豊かに用いる」ことへと着眼点を移し、様々な切り口から聖歌・礼拝に触れることができる内容を心がけています。この会の特徴、いわば「お楽しみポイント」をいくつかご紹介します。々々



多彩な ゲストスピーカー

々々々々「待望の聖歌集」と喜ばれた植田仁太郎主教、ご自身の経験から「聖歌には私たちの心を一つにする力がある」と語られた大畑喜道主教、他教区の聖職もお迎えし、牧会の現場での視点から聖歌への熱い思いを伺ってきました。また、新たな聖歌を編まれた作者から、創作の背景や詞に込められた思いを直接伺えたことは、歌う時の祈りを深める助けにもなりました。聖歌、礼拝、奉仕：様々な観点で語られるお話からは、毎回いろんな気づきが与えられます。

々々々々々々期間中は、夕の礼拝、就寝前の祈り、朝の礼拝、閉会の聖餐式と、礼拝三昧です。時にはギターやリコーダーなどの伴奏も交え、日頃出会えない朝夕の聖歌やチャントをしつとりと歌うことも。何より、主日以外でこれほど祈りに満ちた時間を過ごせる機会はめったにないので、

は？
アフターセッション
々々これぞ「名物」！聖歌集とグラス片手に、あとは寝るだけ、の万全の体制で、リクエストを中心にひたすら歌い続ける熱い夜です。目標は、「目指せ100曲！」、就寝は日付をまたぐこともしばしば：寝不足の身体は、翌朝の展望大浴場と絶景の富士山が癒してくれますので、ご心配なく。



ともに礼拝をつくる

聖職者主体で考えられがち

な礼拝ですが、この会では参加者ひとりひとりが主体的な思いを持って期間最後の聖餐式に臨むことを願い、礼拝準備の一端を「ワークシヨップ」として行ってきました。み言葉の分かち合い、代祷文の作成、応唱のチャントの翻訳、聖歌選びなど、これまでさまざまな試みをしてきましたが、毎回、スタッフの意図や予想をはるかに超えたものが、そこから生み出されてきました。毎回一度限りの礼拝において、そこに集う人々が持ち寄る思いや祈りによって生まれるものをささげられることが、礼拝の「豊かさ」につながることを実感する作業です。



このように盛り沢山な「聖歌集を歌う会」ですが、宿泊が難しい方々からの要望を受け、去る6月16日、初めての試みとして「1Day」版を開催しました。岩前宏司祭を迎え、「賛美しようよ々人生、聖歌あり」と題して歌った聖歌は、約60曲。酸欠アゲイン！の一日でしたが、宿泊版とは違った新たな切り口を発見できたように思います。

そしてこの夏、8月3日々々



めざせ100曲

々々々々々々（金）から4日々々々々々々（土）は、加藤博道主教（前々々々々々東北教区主教）を迎えます。々々

「救いの歴史を歩む」とのテーマで、礼拝学の権威でもある加藤主教からは、また新しい気づきが与えられることでしょう。各教会に既にご案内を送付済みですので、お申込みをお待ちしております。なによりも、この会の最大の楽しみは「たくさんの聖歌と出会えること」に尽きます。新たな聖歌との出会いだけでなく、昔からよく知っている聖歌でも、背景や詞の意味に触れることで、改めてその曲に出会えたような喜びも沸きます。

「聖歌キャンプ」という別名もありますが、教会の敷居を超えた「ファミリーキャンプ」のようにも感じられる「聖歌集を歌う会」、涼しい高原で々々 駿河湾の新鮮な海の幸も堪能しながら、ご一緒に々々 楽しみましょう。々々



シリーズ 宣教への取り組み⑧

英国聖公会の宣教、最近の歩み その5

司祭 塚田 重太郎



前回と前々回、「新しいキリスト教」の一例としてミッシオ・

デイを取り上げましたが、すべての「新しいキリスト教」に共通して言えることは、クリスチャンという言語の文法を無視し、正統的の神学用語に恣意的操作を加え、無限の意味の操作を許容するレベルにまで無意味化する事です。

神学用語の意味を操作してカトリックの信仰を無意味化する試みは、「宗教」の誕生と共に始まりました(このテーマに関心のある方は、William Cavanaugh, *The Myth of Religious Violence* をお読みください)。

使徒たちが宣べ伝えた福音ではなく、「宗教」から話を始めるとき、私たちはすでに教会を世俗権力/国家の僕とするために発明された言語を語っています。この言語こそが、第三帝国と神の国を重ねるドイツ的キリスト教を生み、イエスの名を天皇の名と完全に入れ替え、神国日本を神の国と同一視する日本

的キリスト教を発明することを可能にしました。

ハワードとウィリモンは、ナチス・ドイツは現代神学にとつて究極の試金石であったとしてこう述べています。「バルトは、ヒトラーに対して立ち上がるための神学的材料を教会が持ち合わせていないことに驚愕した。(ヒトラーに対して)「ノー」と言えなかったのは、信仰を現代人に理解される言葉に翻訳し、現代文明を創造するために使えるものとするために、神学者としてのキャリアを用いた、自由主義神学者たちであった」(Hauerwas and Willimon, *Resident Aliens*, p. 25)。

イエス・キリストを「宗教」と取り替えた「教会」は、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」(ヨハネ14:6)という主の言葉を聞く耳を持たず、「ほかのだれによつても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天

下にこの名のほか、人間には与えられていないのです」(使徒4:12)という使徒たちの言葉を嫌悪する「教会」となりました。

使徒たちの福音を、「分け登る籠の道は多けれど同じ高嶺の月を見るかな」というスローガンに取つて替えた「教会」は、イエス・キリストを宣べ伝えることを止め、罪を悔い改めてキリストに立ち返ることのないまま人を死なせるので、キリスト無しにすべての人を救う「理論」を必要とするようになり、その結果、ナチスとホロコーストの犠牲者を「平等」に扱う、「罪を裁かない神」を必要とするようになりました。

イエス・キリストの位置に宗教を据えた「教会」は、使徒たちが宣べ伝えた福音を、マルクス主義、実存主義といった流行の「解放の理論」に翻訳することに全力を傾けてきました。マルクス主義と実存主義が廃れた後に、多くの「教会」が飛びついていたのは、カール・ロジャースのカウンセリング理論でした。

ロジャースが提唱した非指示的心理療法の理論は、2世紀以降の教会が、最も危険な偽りの福音とみなしたグノーシス主義の焼き直しです。グノーシス主義が救い主の必要を否定したように、ロジャースのカウンセリング理論も救い主を必要としません。なぜなら、人間は自分で自分を解放することができるからです。カウンセラーの役割は、グノーシス主義における「義の教師」の役割、すなわち、クラミアントを「真の自己認識」へと導くことです。

福音を心理療法に翻訳した「教会」にとつて、イエスは自己解放を助けるカウンセラーの一人となり、「イエス・キリスト」を語らず、「教会に来てください」と言わず、一人一人の「ニーズ」に仕えることが、最も優れた「宣教」だということになりました。しかしイエスの御名を語らない「宣教」などというものは、新約聖書の中にも、使徒教父たちの中にも存在しません。

私はこのシリーズを、カール・ロジャースの「新しいキリスト教」に対する批判で始めましたが、彼が批判した「新しいキリスト教」とは、つまるところ、イエスがキリストでない「キリスト教」であり、この「新しいキリスト

教」を受け入れた「教会」は、もはや「イエスの御名」を宣べ伝えないので、その結果として衰退し、そして消滅します。

逆に、自分の似姿に従つて福音を変革する者ではなく、使徒たちが宣べ伝えたイエス・キリストによつて罪を赦され、救われ、人生が変革され、永遠の命を与えられた喜びに満たされて、イエスをキリストとして宣べ伝える者がいるときのみ、教会は成長するのです。

5回に渡つて続てきたこのシリーズを、私に神学の仕方を教えてくれたハワードの言葉で閉じさせていただきます。

「クリスチャンは必然的に宣教師なのだ。なぜなら、私たちの存在も私たちの為すこともすべて、イエスの名において私たちが存在し、また為すときのみ意味を成すからである。」「教会が宣教しないのなら、教会がイエスの御名によつて証することのためなら、私たちは教会ではない」(Hauerwas, *Working with Words: On Learning to Speak Christian*, p. 166, 168)。

(聖マーガレット教会牧師)

私たちの教会 [3 3]

ようこそ神田キリスト教会へ



1877年にクーパー師とプランシエ師によって、礼拝が神田区台所町（現在の外神田2丁目）で始められて以来、今年で141年目を迎えることが出来ました。

現在の教会が建設されて早くも27年が経ちました。教会の敷地を二分して、半分の土地を使って貸しビル業をするという試みは教会内外で驚かれ、当時のことは今でもつい最近のことのように感じられます。

時世の流れもあり困難もありましたが、テナントさんも、いかに

も秋葉原！というべき会社さんが入ってくださっています。現在はおかげさまで全フロア満室。このままいけば東京オリンピックが行われる2020年に、新築時の借入金完済する見込みです。その頃には大規模修繕の計画も始まるかと思われます。パイプオルガンも設置されてから21年。戦前から与えられている、恵まれた財産を、これからも生かしていこうと考えているところです。

牧会については、2015年3月に橋本克也司祭が定年退職されて以来、神田は定住の牧師がいない状態となっています。他の教会と同様、御多分にもれず、信徒の高齢化により教会に通うことが難しくなりつつあり、主日礼拝の

140周年記念祝会
(2017年10月9日)

平均出席者数は減少傾向にあるのは、事実となっています。

しかし、昨年6月から井口論司祭が管理牧師として7年ぶりに平均出席者数は減少傾向にあるのは、事実となっています。

神田に復帰され、信徒一同で教会を守ることが続けられています。そして、新しく教会に連なった方もおり、新しい教会のカラーが出現しつつあります。



井口司祭が来られるのは月1回ですが、他の週も、別の司祭が来てくださっており、ほぼ毎週、聖餐式が守られていることは何ともありがたいことと思っています。

これからもたくさん課題に立ち向かっていくこととなりますが、「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。（コリント10:13）」とあるように、信徒一同で、これからも進んでいこうと思っています。

神田キリスト教会は常に開かれています。昼間もパイプオルガンの練習が行われており、その音を聞いているだけでも心落ち着ける空間です。ぜひ、いつでもいらしてください。（沖田 直哉）

《信徒リレーエッセイ》
こどもの遊び場

— 百年の場のちから —

千住基督教会

中島 郁代

近所の小学生に「入って遊んでね」と声をかけたところ、昨年から数人が放課後、教会に集まるようになりました。

礼拝への出席や聖書の学びを促すことはせず、自由に過ごす「遊び場」を目指しました。教会で親や先生以外の大人に甘え、見守られる時間、そこに充ちるイエスキさまの慈しみは見えなくともかれらの生きる力になると、信じたいのです。

ほどなくして、子どもたちのほうから十字架についての質問、そして礼拝に参加してみたいと声が上がりました。今では「イエスキさま大好き！教会大好き！」と叫びながら手を振り帰って行きます。

この地で保育所から伝道を始めた山口信太郎司祭。腕白坊主に愛情深く接したミス・ワイアット。中高生が集った高度成長期。百年余、子どもとともに祈りを捧げてきた場の力を感じています。

いのちへの愛、互いの信頼、
そしてともに生きる平和

日本キリスト教協議会総幹事 金 性 濟（キム・ソンジエ）



去る3月19日、20日に開催された第40回総会を主の恵みのうちに開催し、日本キリスト教協議会（NCCJ）は新たな歩みを始めることになりました。現在、新たに准加盟団体として加盟された3つの団体を含め、NCCJは、日本聖公会を始め、6つの教団と27の教会・団体が加わる協議会となっております。

第40回総会では、活動方針として、「平和のきずなで結ばれ、共に進む」というテーマを掲げました。このテーマの中に、私たちは、この世界と日本の情勢の中で問いかける主の御声を聞くのです。

それぞれの教会も様々な困難を抱えています。私たちは今こそ、この世界の中で福音の原点に立ち帰らなければなりません。教会は救いを求める魂が福音によっていざなわれる「呼び集められた群れ」エクレシアであると同時に、キリスト者はこの教会から地の果てまで主イエス・キリストの証人として遣

わされ、地の塩、世の光として、また平和を作り出す奉仕（ディアコニア）の使命を担う存在です。NCCJとは、それに連なる教会・団体が愛と信頼と平和のきずなで結ばれ、いのちと正義と平和の宣教の天幕を広げ道を進むために主に用いられる存在と言えます。

さる4月27日、朝鮮半島に休戦協定以来これまで65年間の戦争状態を終結させる歴史的な一歩が南北指導者によって踏み出され、世界を驚かせました。まだまだ統一への道のりは遙かですが、戦争に至る武力の道を退け、最後まで対話で平和を実現する道を模索しようとするこの度の動きは、私たちの暮らす日本に、そしてキリスト教会に何を問いかけているのでしょうか。

私たち日本のキリスト者・教会を見つめておられる主のまなざしを覚える祈りの中で、NCCJはこの荒れ野の道の中を、愛と信頼と平和のきずなの天幕を広げながら、ともに主の御あ

とを追いながら、皆さまとこれからも平和を造り出す道を進みたいと考えます。



**同性婚を認める
法規改正が承認
される（ブラジル聖公会）**

会総会は賛成57、反対3、棄権2で同性婚を認める法規改正を承認した。ブラジルでは2012年から同性婚が合法化されており、2015年改正祈

禱書で聖婚式の典礼は既に性的に中立な形式に変更されている。総会にはマーク・ストレンジ大主教（スコットランド聖公会）、リンダ・ニコルズ大主教（カナダ聖公会）がゲスト参加した。「法規改正は聖霊及び相互の愛と敬意に満たされた環境で承認された。我々はイエスの福音への献身と世界のアンゲリカン・ファミリーへの帰属を確認した。我々は賛同しない人々と共に歩み続けることを望む（管区声明）。「我々は原理主義と不寛容に直面する国や世界にとっての灯台である」（自身が同性婚者であるアーサー・カバルカ

ンテ管区主事）。同性婚を認める法規改正を承認した管区はアメリカ（2015）、スコットランド（2017）に続き3つ目。カナダでは2016年、同性婚を認める法規改正を問う投票で賛成票が反対票を上回った。アオテオラ、ニュージーランド及びポリネシア聖公会では2018年、結婚に関する教義は維持する一方、司祭が個人的に同性婚に祝福を与えることを許容することを決議した。「今回の決定はアグリカン・コミュニ

ニオンの大多数の管区が保持する信仰と教義とは相容れない。1998年のランベス会議決議I・10号によれば、結婚とは男女の生涯に亘る合一である。アンゲリカン・コミュニオンはLGBTIQを犯罪視することに反対である。」アンゲリカン・コミュニオン事務局長ジョサイア・アイダウ・ファーロン主教。（6月4日）

次回秋号
11月4日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア（三十八）

1. 分かりにくい！

信徒「先生、本当に平和な世界とはいったいどんな世界でしょう」
牧師「そうですね、多分エベレストの頂上みたいな世界だと思います」

信徒「はあ・・・？」

牧師「すみません、飢え（上）がないという意味です・・・」

2. ある意味ほんとの福音？

今年86歳になるおばあさんに聞いた、
牧師「今まで生きてきて、一番福音を感じたことは何ですか？」
おばあさん「そうじゃのう、戦後しばらくして戦地からお父さんが生きて帰ってきたことかのう、本当にその時は嬉しくて福音を感じました」

牧師「そうですか、でもそれは福音というより“復員”ですね」

3. み言葉の礼拝は・・・

信徒A「み言葉の礼拝は、今の社会問題とリンクしているよね」

信徒B「そうかなあ」

信徒A「だって牧師と信徒の働きに関わることでしょ」

信徒B「まあ、そうだけど」

信徒A「だから、教会にとっては一種の『働き方改革』だよ」